

鶏病の原点：鶏痘

貴方は「塗擦用鶏痘ワクチン」を御存知ですか?知っている方は30年以上にわたって養鶏業に携わってきたベテランです。このワクチンは昭和21年に製造が開始されました。全長4cm程度の極小のブラシにワクチンを付けて外股部の羽を抜いた跡に擦り込んで使用しました。羽根部に発痘し免疫が強く出来るため効果は抜群でした。この塗擦法は特別な知識も技術もいらいため、誰でも接種できました。そのため、動物用ワクチンでこの鶏痘ワクチンのみ「要指示薬」ではないのです。その後、昭和40年代に入って穿刺用鶏痘ワクチンが開発され、現在に至っております。鶏痘は臨床的には皮膚型と粘膜型に区分されます。

皮膚型:鶏痘ウイルスが傷口または昆虫等による吸血で皮膚、顔面、肉冠等に感染し、そこで発痘するもので無毛部では皮膚が発赤、びらんを示し汚れが目立ち、重度になれば生産性に影響します。日齢、性別に関係なく免疫を持たない鶏は発病しますが、若齢期には比較的この型が多く見られます。

粘膜型:鶏痘ウイルスが吸気により咽喉頭、上部気道に感染し気道粘膜上に発痘するもので、粘膜型あるいはジフテリー型とも言われ、ウインドウレス鶏舎で大雛期以降に時々発生します。この症例では高い死亡率を伴い、生産性に大きな影響を及ぼします。

いずれの病型にしろ、発病すれば臨床的に容易に診断できます。図1に我が国の最近10年間における鶏痘の発生あるいは摘発羽数を示しました。数値から解るように現在では本病はワクチン接種によりかなり良く予防されているため発症例は多くはありませんが、依然として発生が見られます。発生事例では何れも不適切なワクチン接種あるいはワクチン非接種が原因と考えられています。

本病はワクチン接種で確実に予防できます。

鶏痘ワクチンは非常に効力の高いワクチンです。適切なプログラムに従って接種すれば確実に予防できます。

図2に年度別に鶏痘ワクチンの合格量をブロイラー及びレイヤーの餌付け羽数で割った数値をパーセントで示しました。一羽当たりの鶏痘ワクチン供給量は0.55d/羽から最近では0.33d/羽まで減少しております。この接種量の減少が本病の完全な制圧を妨げているのかも知れません。

標準的には表1の接種法が推奨されます。鶏痘ワクチン接種鶏群でも免疫状態には個体差があります。免疫の切れた個体から順次感染の危険に曝されます。現在、In ovoあるいは初生雛接種法が広範囲で実施されていますが、幼雛期に鶏痘ワクチンを接種した場合、免疫の持続期間が短くなります(図3)。

必ず追加接種(補強免疫)を実施して下さい。鶏痘ワクチンを接種すれば10~14日後には免疫ができます。免疫状態を確認するためにはワクチン接種後5~8日にかけて接種部位を観察し、発痘があれば免疫が賦与されたと判断出来ます。ワクチン接種後長時間が経過した鶏における免疫の確認は、前回と逆の翼膜にワクチンを接種し、発痘の有無を観察して発痘が認められなかった場合には「免疫がある」と判断できます。鶏痘ワクチンは昔も今も鶏にとって不可欠です。

図1: 最近過去10年間における鶏痘の発生状況

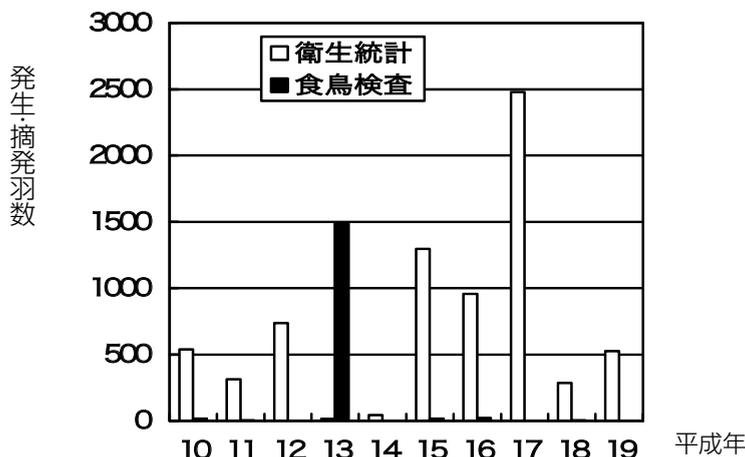
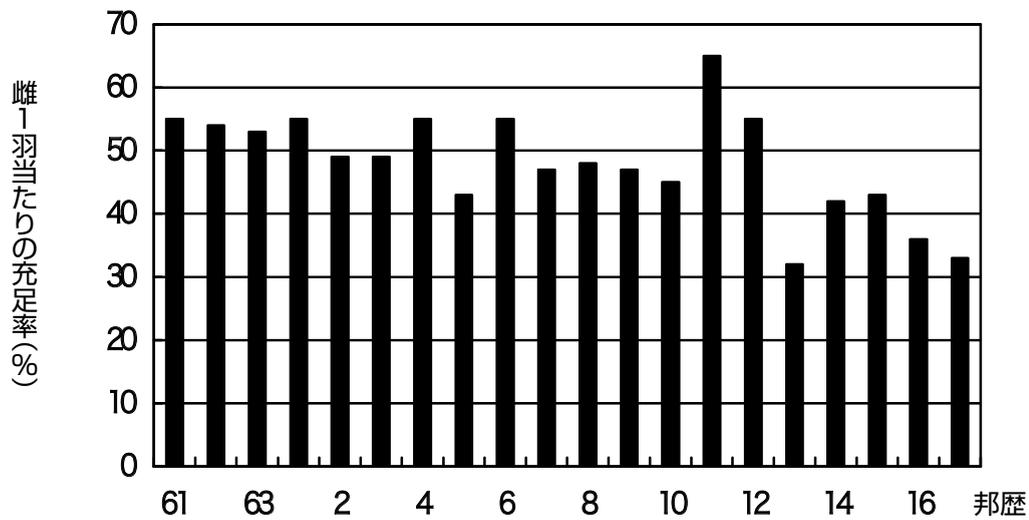


図2. 雛餌付け羽数と鶏痘生ワクチンの合格量比



接種時期	次回の追加接種適期
幼雛期 (0~13日齢接種)	60~70 日後
中雛期 (14~21日齢接種)	80~100 日後
大雛期 (70~90日齢接種)	150~180 日後

表1. 鶏痘ワクチンの標準的接種法

図3. ワクチン接種後の免疫の持続期間

